

「開元天寶遺事」の傳本について：日本傳存の王仁裕自序をめぐる

竹村，則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門：教授：中国文学

<https://doi.org/10.15017/4978>

出版情報：文學研究. 102, pp.49-66, 2005-03-31. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

「開元天寶遺事」の傳本について

——日本傳存の王仁裕自序をめぐって——

竹 村 則 行

一 はじめに —— 「開元天寶遺事」の概要 ——

盛唐玄宗期の逸事を記した「開元天寶遺事」は、「明皇雜錄」や「唐國史補」などと並び、『唐書』『資治通鑑』等の歴史書の缺を補うものとして、これまで種々の文學作品等に廣く活用されて來た。「開元天寶遺事」は、その内容に開元天寶期の宮中の秘事や民間の逸事を多數含み、登場人物も玄宗や楊貴妃はもとより、正史等に記録されない民間人まで種々雑多である。描寫の評價は讀者によつて異なるが、明・胡應麟『少室山房筆叢』卷三十二に「其の書は淺俗鄙陋」とあるのがほぼ妥當と思われ、該書は文章の秀逸さよりも、むしろ故事の珍奇さによつて後世の文人に傳承されたと云えるであろう。

この「開元天寶遺事」をめぐっては、文章の鄙俗さ、成書過程が不明であること等から、從來、作者僞托説が根強く付き纏つて來たが、實は日本に傳存するこの本には、中國の傳來本では亡逸した王仁裕の自序を有し、そこには、この本の成立に關する經緯が具體的に述べられる。検討の結果、筆者はこの自序は王仁裕の自序と考えられる

という判断を得た。これが正しいとすれば、中國の論壇ではこの一千餘年間、王仁裕自序が脱落した「開元天寶遺事」本に據つて作者僞托説を踏襲して來たことになる。その弊害は小さくないものがあり、かの『四庫提要』の總纂官紀昀もこの自序を見ていなかったと察せられるし、宋・蘇軾の「讀開元天寶遺事」詩も、本來の詩題が意圖的に改題されたと考えられるのである。

小稿は、以上の經緯を踏まえ、日本傳來本にのみ傳存する王仁裕自序に注目し、その作者や成書過程について再検討を加え、以て「開元天寶遺事」の傳本をめぐる中國文學史上の長年の空白を埋めようとするものである。

二 「開元天寶遺事」をめぐる從來の言及

論述に当たり、「開元天寶遺事」をめぐる從來の言及を概括しておけば、以下の通りである。

まず、該書について記した初見と思われる宋・晁公武『郡齋讀書志』卷九には、

開元天寶遺事四卷……右漢王仁裕撰。仁裕仕蜀、至翰林學士。蜀亡、仁裕至鎬京、

採摭民言、得開元天寶遺事一百五十九條。

とある。このうち「蜀亡びて、仁裕鎬京に至り、民言を採摭し、開元天寶遺事一百五十九條を得たり」という記述は、後述する日本傳本にのみ傳わる「開元天寶遺事」自序の表現に酷似しており、晁公武がその自序を引用したであろうこと、とすれば、この頃までの中國傳本は自序を有していたことが推定される。この外、宋代の傳本記録としては、陳振孫『直齋書錄解題』卷七、尤表『遂初堂書目』、元・脱脱等『宋史』卷二〇三・藝文志等があるが、いずれも『郡齋讀書志』の具體的な記述には及ばない。

一方、「開元天寶遺事」の記述内容については、早く南宋・洪邁が別人の僞托説を主張する。その『容齋隨筆』卷

一「淺妄書」を見ると、洪邁はその根拠として、①姚元崇の履歴記述、②郭元振の活躍時期、③楊國忠と張九齡の世代設定、④張九齡と蘇頌の世代設定の四例の記述矛盾を擧げる。後述するように、中国で早く佚したと思われる「開元天寶遺事」自序には、長安に赴いた王仁裕が、土地の古老が語る玄宗期の遺事を蒐集して聞き書きとして記録したという成立の経緯が述べられる。このことを勘案すれば、「開元天寶遺事」は王仁裕撰というより、王仁裕輯の要素が濃い、洪邁がその事情に言及しないのは、或いはこの時既に「開元天寶遺事」自序が失われていた可能性がある。同記事において、洪邁が興化軍學刊の「(開元天寶)遺事」に言及するのは、南宋福建の刊本記録として貴重である。次に、洪邁を襲って「開元天寶遺事」偽作説を主張するのは明・胡應麟である。即ちその『少室山房筆叢』卷三十二は、『太平廣記』中に王仁裕撰「玉堂閒話」を載録するのに、「淺俗鄙陋」な「開元天寶遺事」を全載せないことから、その偽作説を導く。

次に清に入ると、紀昀が『四庫全書總目提要』卷一四〇において、以下のように述べる。

蓋委巷相傳、語多失實。仁裕採摭於遺民之口、不能證以國史、是即其失。必以爲依託其名、則事無顯證。今仍從舊本、題爲仁裕撰焉。(蓋し委巷に相傳するは、語に實を失すること多し。仁裕は遺民の口より採摭するも、證するに國史を以てする能はざるは、是れ即ち其の失なり。必ず以て其の名を依託するを爲すも、則ち事に顯證無し。今仍ち舊本に従ひ、題して仁裕撰と爲す。)

ここに紀昀が「仁裕は遺民の口より採摭す」と述べるのは、先の『郡齋讀書志』にいう「採摭民言」を言い換えたものである。紀昀はここで、從來の諸説を踏まえ、「國史」と齟齬する叙述の缺點を指摘し、誰かが作者名を王仁裕に「依託」したのであろうが、確證に乏しいので、「舊本」によって「仁裕撰」とすると述べる。一代の碩學の言はさすがに簡明にして要領を得ているが、それでも尚お疑問が残る。それは、何故紀昀は「開元天寶遺事」の自序に言及しないのかという疑問である。提要文からは、紀昀が『郡齋讀書志』を参照したことは分かるが、その成立

に關して多くの材料を点綴する自序（後述）への言及は皆無である。察するに、これは紀昀が據った該本のテキスト「兵部侍郎紀昀家藏本」（恐らくは後述の『顧氏文房小説』本）そのものが自序を有していなかった爲であろう。續いて清・周中孚『鄭同讀書記』卷六十三には、

竊謂、小説家言、得諸委巷、聊以資談柄耳、不能一一責必實也。（竊かに謂へらく、小説家の言は、これを委巷より得て、聊か以て談柄に資するのみにして、一一必ず實ならんことを責む能はざるなり。）

とあつて、「小説家言」が史實と乖離するからといって、一一目くじらを立てることもないとするが、紀昀と同じく、「開元天寶遺事」自序への言及は一切無い。

ところで、宋版の蒐集で知られる清の黃丕烈は、『士禮居藏書題跋記』卷四に三種の「開元天寶遺事」題跋を載せるが、そのいずれもが「自序」に言及しない。更に、現代の研究者周勛初氏は『唐語林校證』附録において、『唐語林』が依據した「玉堂閒話」は「開元天寶遺事」であると主張するが、やはり「開元天寶遺事」自序には触れない。以上、「開元天寶遺事」をめぐる從來の言及を見てみると、そこに共通する一つの顯著な特徴に気付く。それは、「開元天寶遺事」の成立の経緯について貴重な發言であるはずの王仁裕「自序」への言及が、当初の『郡齋讀書志』を除いて皆無であることである。その自序文については次章に改めて分析するが、洪邁・胡応麟・紀昀等の時代を代表する碩學が、偽作の可能性も含めて全く「開元天寶遺事」自序文に言及しないことは、まず、その時代の「開元天寶遺事」が自序そのものを缺落していたことを疑つてかかる必要がある。

三 「開元天寶遺事」和刻本の自序について

さて、中國側資料に一切傳存を聞かず、和刻本にのみ傳えられる「開元天寶遺事」自序の全文百十六字は次の通

りである（寛永十六年刊本による⁽²⁾）。

仁裕、破蜀之年、入見于明天子。假途秦地、振轡鎬都、有唐之遺風、明皇之故迹、盡舉目而可觀也。因得詢求事實、採摭民言、開元天寶之中影響如數百餘件、去凡削鄙、集異編奇、總成一卷。凡一百五十九條、皆前書之所不載也。目之曰、開元天寶遺事。雖不助於風教、亦可資於談柄。通識之士、諒無訕焉。（仁裕、破蜀の年に明天子に入見す。途を秦地に假り、轡を鎬都に振へば、有唐の遺風、明皇の故迹、盡く目を舉げて觀るべきなり。因りて事實を詢求し、民言を採摭するを得、開元天寶の中に影響するもの數百餘件を如（＝）り、凡を去り、鄙を削り、異を集め、奇を編し、總て一卷と成せり。凡そ一百五十九條、皆前書の載せざる所なり。之を目して「開元天寶遺事」と曰ふ。風教に助せずと雖も、亦た談柄に資すべし。通識の士、諒として訕る無かれ。）

この自序によれば、王仁裕は、自分が仕えた王衍の前蜀が滅亡した九二六年、後唐の明天子（明宗）に新たに仕えるべく、首都の洛陽に赴く途中に經由した鎬都即ち長安において、當地に今も根強く傳わる明皇（玄宗、在位七三〇～七五五年、七六二年没）の「遺風」「故迹」に感銘を受け、「事實」を追求し、「民言」を採集し、明皇の開元天寶期に深く「影響」すると思われる遺事を精選輯録して、「開元天寶遺事」百五十九條を成したという。

當時の政治混亂の中で、王仁裕が實際に「民言」を採集したり、編集したのは、或いはもつと後年であるかも知れない（後述のように一説では九三三～四年）が、この自序が眞を傳えているとすれば、王仁裕が「開元天寶遺事」を編纂した直接の契機がこの年にあつたことは注目すべきである。この九二六年は玄宗が没した年から數えて一六四年後、盛唐の玄宗當時の故事がようやく風化し、傳説化しようとする頃であり、それだけに今も長安に根強く残る玄宗の故事に、作者は新鮮な驚きを感じたものであろう。また、王仁裕が現在新たに仕えようとする後唐にとって、近い過去の盛唐の盛世は手本や教訓にならなかつたはずはなく、ひいては、新たに仕える後唐への就職活動の面から考えても、この「開元天寶遺事」の編纂は、目的であれ、結果であれ、王仁裕に有利に作用したものである。

ともあれ、この「開元天寶遺事」自序には成書の経緯が具體的に述べられており、その内容は、次章に述べる王仁裕の事跡に照らしても大きな矛盾は認められない。中國側資料に傳存せず、日本側資料にのみ傳えられるこの自序については、後世の日本人、或いは日本渡來の中國人の偽作説も考えられないこともないが、上述の内容を總合的に判断して、筆者は、やはり王仁裕自撰の自序であるとして本論の叙述を進めるものである。³⁾

「開元天寶遺事」の日本傳本については、注(2)に挙げた古鈔本、古活字本等が認められるが、いつどのようにして日本に傳來したのか、五山僧による宋刊本やその鈔本の將來が考えられるとしても、経緯の詳細は不明である。一方、中國においては、當初の『郡齋讀書志』の解題がどうやら「自序」文を引用すると思われるのを除き、その後、今日に至る一千餘年の間、紀昀を含む歴代の碩學が一言隻句も言及しないことから、「開元天寶遺事」自序がかなり早くから失傳したことが推測されるが、その間の事情はこれまた明らかではない。これら不明の事情の解明は甚だ困難であるが、その爲の基礎作業として、まずは王仁裕の傳記、及びそれに伴う問題について検討しておく必要がある。

四 王仁裕略傳、及び『太平廣記』未收の問題

王仁裕(八八〇—九五六)の傳記資料には、門生の宋・李昉撰「王仁裕神道碑」⁴⁾のほか、『舊五代史』卷一二八、『新五代史』卷五七、『十國春秋』卷四四等があるが、いま、それらを簡潔にまとめた『中國文學家大辭典(唐五代卷)』⁵⁾の記述を、官歴を中心に紹介すれば次の通りである(括弧は引用者)。

王仁裕……字は德輦、天水(今日の甘肅)の人。(略)唐末に秦州節度判官と爲る。後に蜀に入り、前蜀の後主(王衍)に事へ、中書舍人、翰林學士と爲る。前蜀の亡ぶや、又後唐に事ふ。(略)之を久しくして、都官郎中を以

て翰林學士に充てらる。後晉の時、司封、左司郎中、右諫議大夫、給事中等の職を歷す。後晉の武帝（石重貴）開運二年（九四五）、左散騎常侍に遷る。後漢の天福十二年（九四七）、改めて戸部侍郎を授けられ、翰林學士承旨に充てらる。乾祐元年（九四八）、禮部貢舉を知し、擢せられて戸部尚書と爲る。三年（九五〇）、兵部尚書に改まる。後周廣順元年（九五二）、太子少保と爲る。顯徳三年（九五六）、卒す、年七十七、太子少師を贈らる。

これによると、晩唐の僖宗朝に生まれた王仁裕は、唐末五代の政治混亂の中で、まずは後唐の秦州節度判官になり、次いで前蜀の王衍に事えて中書舍人、翰林學士と爲り、更に後晉にあつては司封、左司郎中、右諫議大夫、給事中等の職を歷任している。また、後晉の武帝下にあつては左散騎常侍、後漢の高祖（劉知遠）下にあつては戸部侍郎、翰林學士承旨等の要職に就いている。このように、王仁裕が晩唐五代の複數の政權下で種々の官職を歷任していることについて、任免をめぐる事情、官職の實態等の詳細は不明であるが、めまぐるしく政權が興亡した晩唐五代を生き抜いた文人としては、やむを得ない処世の選擇であつたであらう。「開元天寶遺事」編纂の時期については、賈晉華・傅璇琮『唐五代文學編年史（五代卷）』⁶は後唐明宗長興四年（九三三）から翌年にかけてとする。

ここで検討すべき問題は、當時近い存在であつた門生の李昉の記述に、「開元天寶遺事」への言及、引用が見られないことである。即ち、李昉は、戸部侍郎王仁裕が知貢舉を務めた後漢高祖乾祐元年（九四八）の科舉において、元の王溥等と共に選抜された二十三名の進士の一人である。⁷にも関わらず、李昉撰「王仁裕神道碑」には王仁裕の著作を列舉する中に「開元天寶遺事」に言及しないし、李昉等奉敕編『太平廣記』中には、王仁裕著「玉堂閒話」の引用はあつても「開元天寶遺事」の引用は無い。一見不可解に見えるこの現象について、筆者は次のように解釋する。

まず「開元天寶遺事」成立の経緯、及びその特徴について。先に検討したように「自序」が事實を傳えているとすれば、「開元天寶遺事」は、後唐に仕える爲に長安を經過した王仁裕が、その地に没後百數十年を経てなお根強く

傳えられる盛唐の玄宗故事に感銘を受け、土地の故老の言説を採集したものであった。従って載録された「一百五十九條」中には史實と齟齬し、また卑俗な表現も混在しており、後世の偽作論者に論據を與えることになったが、筆者は、これらの事實は、「開元天寶遺事」の王仁裕作（編）説に何ら齟齬しないものと考ええる。このような成立の経緯を有する「開元天寶遺事」について、自序が「雖不助於風教、亦可資於談柄、通識之士諒無誚焉」と述べることは、むしろ編作者の謙辭であろうが、一方で本意でもあったであろう。つまり、作者自身は「開元天寶遺事」を「風教」に役立つ「著作」とは考えず、「話柄」を提供する生録、聞き書きのメモ程度にしか考えていなかった。従ってその意を受けた門生の李昉が、四十年も後の太平興國二年（九七七）に『太平廣記』を奉敕編纂した時、師弟の共通見解として、翰林院（玉堂）在任時の「玉堂閒話」を採録しても「開元天寶遺事」は除外したことが考えられるのである。

五 蘇軾の「讀開元天寶遺事」詩について

中國における「開元天寶遺事」の傳承に絡んで屢々言及されるのが蘇軾の「讀開元天寶遺事」詩である。即ち、先の紀昀の『四庫全書提要』は、蘇軾のこの詩に言及しつつ「開元天寶遺事」の成立時期を推測するし、今日の繆元朗氏は、蘇軾詩に描かれた内容こそ「開元天寶遺事」の散逸部分に當るとする。しかし、あらためて蘇軾詩集の版本に就いて考察してみれば、これらの推測は必ずしも當を得ていないように思われる。本章ではこのことについて検討してみたい。まず、當該詩は次のようである。

姚宋亡來事 一官銖重萬人輕 朔方老將風流在 不取西蕃石堡城 （其一）

潭裏舟船百倍多 廣陵銅器越溪羅 三郎官爵如泥土 爭唱弘農得寶歌 （其二）

琵琶絃急袞梁州 羯鼓聲高舞臂鞞 破費八姨三百萬 大唐天子要纏頭 (其三)

其一詩は、開元の名相姚崇・宋璟が死して後、朝野にはびこる官權重視、人命輕視の風潮を嘆き、玄宗の意圖に背いて、吐蕃が堅守する石堡城を兵士の犠牲に配慮して攻略しなかつた朔方節度使王忠嗣の勇氣を稱える(出典は『舊唐書』卷一〇三、『新唐書』卷一三三、王忠嗣傳)。其二詩は、望春樓の新潭で贅澤な船遊びに耽る「三郎」玄宗を揶揄する(出典は『通鑑』卷二二五、天寶二年條、『舊唐書』卷一〇五、『新唐書』卷一三四、韋堅傳、鄭榮「開天傳信記」等)。其三詩は、賑やかに樂器の演奏に興じる「大唐天子」玄宗と楊貴妃一族の様子を描く(出典は鄭榮「開天傳信記」、鄭處晦「明皇雜錄」、樂史「太眞外傳」等)。

蘇軾のこの三詩は、いずれも開元天寶期の玄宗楊貴妃に纏わる故事を描くが、その詩題に「讀」とある以上、「開元天寶遺事」の讀後感が記されて當然であると思われるのに、出典に示した通り、その詩の内容は今日傳存する「開元天寶遺事」の記事とは全く関わらない。この詩を「開元天寶遺事」散逸部分に相當すると主張する言説もあるが、明確な証拠に基づく譯ではない。その可能性を否定する根據も無いが、三詩とも散逸部分に含まれると考えるのは不自然である。筆者は、蘇軾のこの詩を蘇軾詩集の版本について調査したところ、意外な事實を發見したので、以下それに基づいてこの問題を考えてみたい。まず、この詩を載録する蘇軾詩集名を、詩題と共に掲げると次のようである。

開元遺事三首……………宋・王十朋編『增刊校正王狀元集註分類東坡先生詩』卷二

讀開元天寶遺事三首……………明刊『東坡七集』第七集『東坡續集』卷二

讀開元天寶遺事三首

一作開元遺事三首……………清・馮景補註「蘇詩續補遺」卷下(『施註蘇詩』附録)

讀開元天寶遺事三首……………清・馮應榴輯注『蘇文忠公詩集合注』卷二

「開元天寶遺事」の傳本について

ここに挙げたのは代表的な蘇軾詩集であり、調査を盡くせば更に新たな資料が追加されるかも知れないが、それでも該詩の詩題をめぐる顯著な傾向は確かに読み取れるであろう。それは、今日の如く詩題を「讀開元天寶遺事三首」とするのは、實は明代の版本以降のことであり、原本たる宋本においては單に「開元遺事三首」と題するのみであったという事實である。このことを明確に指摘する上記の清・馮應榴注は次のようである。

王本詠史類、舊王本同、題云「開元遺事三首」。『七集』本載「續集」、補施注本載「續補遺」下卷⁽¹²⁾。

この事實を念頭に置けば、先に挙げた通行本の詩題と詩内容が一致しない疑念は氷解するであろう。即ち、蘇軾詩の原題は「開元遺事三首」とする開元（天寶）期の詠史詩だったのであり、これを「讀開元天寶遺事三首」と改題したのは明人の改竄と考えられ、今日の我々が明清以降の版本の詩題に拠って該詩を「讀開元天寶遺事」とするのは是正を必要とする。では何故「開元遺事」の詩題が「讀開元天寶遺事」に取って代わられたのか、そのことを明らかにするには、明代以降の該書の出版と流通について述べねばならない。

六 明清期における「開元天寶遺事」の出版

「開元天寶遺事」を輯録する宋元明清期の叢書・類書名を、管見の限り、條數と共に挙げれば次の通りである（民國および現代の叢書、單行本については省略する）。

- ① 宋・曾慥『類說』卷二十一……「開元天寶遺事」八十二條
- ② 宋・闕名『紺珠集』卷一……「開元天寶遺事」八十七條
- ③ 明・陶宗儀『說郛一百二十号』号五十二……「開元天寶遺事」百四十六條
- ④ 明・顧元慶『顧氏文房小說』……「開元天寶遺事」百四十六條

- ⑤ 明・李枋『歷代小史』卷十八……「開元天寶遺事」百二十九條
- ⑥ 明・吳永『續百川學海』丙集……「開元天寶遺事」百四十六條（前記③『說郛』に同じ）
- ⑦ 明・馮猶龍（闕名？）『五朝小説』唐人百家……「開元天寶遺事」百四十六條
- ⑧ 清・紀昀『四庫全書』子部十二小説家類一……「開元天寶遺事」百四十六條
- ⑨ 清・黃丕烈跋、西泠印社本『開元天寶遺事』……百四十六條
- ⑩ 清・王文誥、邵希曾『唐代叢書』（『唐人說薈』）……百四十六條

この一覽から、「開元天寶遺事」が今日の体裁を整えたのは明代以降であることが分かり、特に④顧元慶『顧氏文房小説』本の發刊がその流布に大きな影響を與えたと思われる。顧元慶は字は大有、長洲（今の蘇州）の人。明成化二十三年（一四八七）〜嘉靖四十四年（一五六五）。藏書樓夷白堂に萬卷の圖書を藏するのみならず、善本の刻書で知られた當時の一大藏書家であつた。¹⁵ 清朝後期の同郷の藏書家黃丕烈（一七六三〜一八二五）は『士禮居藏書題跋記』卷四「開元天寶遺事二卷明刻本」の題跋において、「罕秘」（稀觀本）という語を用いて、顧元慶藏「開元天寶遺事」を手に入れた喜びを表現する。また顧元慶及び『顧氏文房小説』について、同書は、

陽山の顧氏、元慶と名する者は、吳中に在りて前輩を藏書するを爲し、特に善く藏するのみに非ずして又善く刻す。其の『顧氏文房小説』と標題する者は、皆古書を取りて刊行し、知は先務とする所に急なり。此の「開元天寶遺事」は未だ従りて出る所の本云何を知らずと雖も、然れども西賓陸拙生藏の『歷代小史』本を借りて之を證するに、彼は已に幾條を脱落すれば、是れ此の本を善と爲す。¹⁶

と述べ、顧元慶の善本出版活動を高く評価する。黃丕烈の推稱を俟つまでもなく、當時可能な限りの善本の刻書を目指した『顧氏文房小説』は、明代江南の讀書人の好評を受けたのみならず、清代以降、今日に至る中國、更には日本における刊本の定本となっている。『顧氏文房小説』四十種は、「開元天寶遺事」以外に「楊太眞外傳」「梅妃

傳」「高力士外傳」等の關連作品を含んでおり、『顧氏文房小説』が今日に至る善本小説資料の傳播に果たした役割は甚大である。「開元天寶遺事」について言えば、その後の紀昀の『四庫全書總目提要』は恐らく『顧氏文房小説』本に基づいているし、今日の通行本『開元天寶遺事十種』⁽¹⁷⁾は『顧氏文房小説』本を底本にしたことを明記する。

このように、『顧氏文房小説』が明代の一時期に於いて扱ふべき定本を中國文學界に提供した功績は大であるが、一方で瑕疵が無い譯ではない。それは、その定本が含む缺點も同時に廣く傳染してしまったことである。「開元天寶遺事」について言えば、王仁裕撰と思われる自序を缺いた爲に、その後、紀昀を始めとして多くの後世の研究者の判断を誤らせたことは、當時のテキスト傳承の情況からは已むを得なかつたとはいえ、やはり小さくない瑕疵であつたと言わねばならないであらう。

七 まとめ —— 「開元天寶遺事」傳本の個別性と普遍性 ——

以上、小稿は五代・王仁裕撰とされる「開元天寶遺事」の傳本について、中國では早に傳を失した王仁裕自序が日本側資料に傳存している事實を取り上げ、その傳承過程について考察を加えた。關連する具體資料不足の爲に憶測せざるを得なかつた部分もあるが、該書の成書や傳承に關するおよその輪郭は明らかになつたかと思う。

小稿で考察したテーマは、五代小説「開元天寶遺事」の傳播という些細なものであるが、この個別テーマは、中國文學史の展開全般に共通する普遍要素を含むと思われる。そこで、以下小稿のまともとして、(一)「開元天寶遺事」の素材、(二)王仁裕と「開元天寶遺事」の時代背景、(三)「開元天寶遺事」の傳本、に分けて總括的に捉え直してみたい。

（一）「開元天寶遺事」の素材

「開元天寶遺事」が今日まで傳承し得た要因の一つは、盛唐開元天寶期に取材したという素材の魅力であろう。「開元天寶遺事」には玄宗や楊貴妃、楊國忠等の要人のみならず、王元寶、王休等の、今日では傳を佚した豪家、隱士、妓女に至るまで種々の階層を巡る雑多な庶民の故事が飾らない文章で縷々記録されており、盛唐中國の官民を含む生活の實態をリアルに把握できる効果がある。その表現が「淺俗鄙陋」であるとする明・胡應麟『少室山房筆叢』の評価も一方で肯定するが、それは作者の偽作説を導くものではなく、新発見の王仁裕自序を斟酌すれば、當時の現地住民の生々しい記録の息吹であるという觀點から、別の價值を認めることができるように筆者は考える。當時のヒロインである楊貴妃をめぐる故事の魅力が盛唐という時代に深く關連することについて筆者は別に考察したが、⁽⁸⁾「開元天寶遺事」についても、この書が幾らかの經緯を経て今日に傳承された原因として盛唐時代のもつ魅力⁽⁹⁾を缺くことはできないであろう。否、より近い後世に生きた王仁裕が、まず盛唐の魅力に惹かれたのである。

（二）王仁裕と「開元天寶遺事」の時代背景

日本に傳存する「開元天寶遺事」自序によれば、王仁裕がこの書の編纂を構想するに至った直接の動機は、自分が仕えた前蜀が滅亡し、新たに後唐に仕えるべく首都洛陽へ赴く途中の長安において目睹した、今も強く残る「有唐の遺風、明皇の故跡」に感銘を受けたことである。これは尊重すべき作者の自述であるが、既に第三、四章で考察した通り、當時の王仁裕をめぐる背景からすれば、その編纂の動機には別の要素が考えられる。つまり、王仁裕はこの時長安で採輯した開元天寶遺民の聞き書きを、何らかの形で新任の後唐における就職ないし官吏活動に活用したことが考えられるのである。むろん、王仁裕が明皇の治政に純粹に感動したこともその通りであろうが、後唐を創立した莊宗李存勳が大唐の天下を強く意識して國號を定めた⁽¹⁰⁾ことを斟酌すれば、その後唐への赴任途上にあつ

た王仁裕が玄宗の故事を輯録した行爲と、後唐での官吏新任とは強い因果關係があつたと考えるのが自然であろう。ただ、「開元天寶遺事」は胡應麟の批判を俟つまでもなく、表現はかなり「淺鄙」であり、長安遺老の聞き書きを直接に書き留めたとしても、十分な彫琢は施されていない。或いは後唐の明宗への上奏文の何らかの基礎資料として輯録したものかとも疑われるが、今は確證に乏しい。ただ、門生の李昉が『太平広記』を奉敕編纂した際に、主考たる王仁裕の「開元天寶遺事」中の記事を組み入れなかつた理由として、メモ録程度のこの書を敢えて輯録對象から除外したことが考えられるのである。

(三) 「開元天寶遺事」の傳本

『士禮居藏書題跋記』に、宋本の蒐集で知られる清・黃丕烈所藏の「開元天寶遺事」銅活字本・明刻本・舊鈔本の題跋を記録する。黃丕烈は、ここで宋刻『新定續志』書籍門にその名があることから宋本「開元天寶遺事」の存在を推定するが、どうやらその書齋「百宋一纏」中には宋本「開元天寶遺事」は含まれなかつたと覺しい。彼がその題跋に屢々言及し、また和刻本の後跋にも明記する宋本は「紹定戊子」(一二二八南宋紹定元年)、陸子適(一二七八～一二五〇)が桐江學宮から刊行した「開元天寶遺事」である。嚴父陸游の文集刊行を始めとして、南宋における出版活動で名高い陸子適の後跋は、該書の刊行年を明記することで注目されるが、黃丕烈も目睹しなかつたこの宋本の所在はその後行方が知れない。また、宋・洪邁『容齋隨筆』卷一は「興化軍學」刊の「開元天寶遺事」に言及するが、これも今日では所在不明である。これらの宋刊「開元天寶遺事」に果たして王仁裕の自序を有していたか、今日では確かめようもないが、初めて書志に記録する宋・晁公武『郡齋讀書志』の文言が王仁裕自序に重なる部分があることからすれば、少なくとも晁公武が目撃した「開元天寶遺事」は自序を有していたと考えられる。しかし、その後一千年近くの間、該書成立の經緯を具體的に記すこの自序が中國の書誌に全く見えないことは、彼土において早

く王仁裕自序が失傳していたことを示すであろう。一方、日本傳來の「開元天寶遺事」には王仁裕自序を有しており、内容の具體性からみて、筆者はこれを後人の偽作ではなく、王仁裕の自序の可能性が高いと判断する。該書の傳本は室町期から認められるが、江戸期以降に出版された和刻本の底本は、自序を有しない明・顧元慶『顧氏文房小説』本ではなく、それ以前に日本に流入していた古鈔本、或いはその底本である宋本系統の「開元天寶遺事」であつたと考えられる。但し、これら諸本の流入や傳承の経緯は依然として不明である。

以上、「開元天寶遺事」の傳本を巡っては、種々の事情が未解決のまま残されているが、中国圖書の成立と傳播、日本への流入、傳承の過程等の諸要素を考えれば、その傳本は、決して個別例のみに止まらない普遍的で典型的な要素を含むように筆者は考える。

注

(1) 中華書局、一九八七年、七九四頁。また『周勛初文集』五（江蘇古籍出版社、二〇〇〇年）二七七、四八五頁。

(2) 汲古書院『和刻本漢籍隨筆集』所収。これより更に古いと思われる古活字本（神田喜一郎舊藏、大谷大學圖書館藏。識語に「元和年中木活字刊本」とある。「大谷本」と略称）、及び手鈔本（反町茂雄による天理大學寄贈本。識語に「文明永正頃古寫本」とある。「天理本」と略称）との異同は次の通りである。

〔汲古本〕 ↑〔大谷本〕〔天理本〕

〔假途〕 ↑〔暇塗〕〔大谷本〕・〔假除〕〔天理本〕

〔詢求〕 ↑〔詢來〕〔大谷本〕・〔詢永〕〔天理本〕

〔影響如數百餘件〕 ↑〔影響如件者如數百餘件〕〔大谷本〕・〔影響如數百餘件〕〔天理本〕

〔一百五十九條〕 ↑〔一百十九條〕〔天理本〕

〔通識之士諒無誚焉〕 ↑〔通識之士諒無誚焉開元天寶遺事〕〔天理本〕

なお、和刻本の後跋については、「大谷本」は異同がないが、「天理本」は後跋を有しない。

此書所載、明皇時事最詳、至一話言一行事。後人文字間所引、大抵出於此書者多矣。紹定戊子、刊之桐江學宮。山陰陸子適書。(此の書に載する所、明皇の時事最も詳しく、一話言、一行事に至る。後人の文字の間に引く所は、大抵此の書に出づる者多し。紹定戊子(一一二八)、之を桐江の學宮に刊す。山陰の陸子適書す。)

署名の陸子適は陸子適の誤り。陸子適は陸游の子息であり、父の『渭南文集』を始め、南宋における出版活動で著名な文人である。

- (3) 豊富な関連資料を羅列する『唐五代文學編年史(五代卷)』(賈晉華・傅璇琮著、遼海出版社、一九九八年)においても、この自序への言及はない。千餘年來知られていなかった「開元天寶遺事」自序の存在を闡明にしたのは、實に陳尚君復旦大學教授である。早稻田大學の研究員として日本に滞在中であった氏は、二〇〇三年二月、第二〇二回九州大學中國文藝座談會において特別講演され、このことに触れられた。詳しくは『中國文學論集』三十二號(九州大學中國文學會、二〇〇三年十二月)所収「石刻所見玄宗朝的政治與文學」参照。氏はここで、中國で從來知られていなかった自序の全文を紹介し、王仁裕自序として信憑性があること、自序は九三三〜四年頃に書かれたであろうことを論述している。

- (4) 『全宋文』(曾棗莊・劉琳主編、巴蜀書社、一九八八年)卷四六、また『中華大典』文學典、隋唐五代文學分典(江蘇古籍出版社、二〇〇〇年)所収。

- (5) 周祖譔主編、中華書局、一九九二年。「王仁裕」項は吳在慶氏執筆。
字德輦、天水(今屬甘肅)人。(略)唐末爲秦州節度判官。後入蜀事前蜀後主、爲中書舍人、翰林學士。前蜀亡、又事後唐。(略)久之、以都官郎中充翰林學士。後晉時、歷司封、左司郎中、右諫議大夫、給事中等職。後晉出帝開運二年、遷左散騎常侍。後漢天福十二年、改授戸部侍郎、充翰林學士承旨。乾祐元年、知禮部貢舉、擢爲戸部尚書。三年、改兵部尚書。後周廣順元年、爲太子少保。顯德三年、卒、年七十七、贈太子少師。

- (6) 遼海出版社、一九九八年、二五九頁。

- (7) 清・徐松『登科記考』卷二十六參照。なお、後に宰相に出世する王溥は『唐會要』『五代會要』の著者。

- (8) 傳存するのは開元卷二十五條、天寶上卷三十六條、天寶下卷八十五條の計百四十六條。これに「水西流」條(『紺珠集』卷一)、「凌波曲」條(『紺珠集』卷一)、「碧雞漫志」卷四等の二條を加えても、殘存は百四十八條のみであり、十一條は早く佚したと思われる。

(9) 蘇軾集中有「讀開元天寶遺事四絕句」、司馬光作『通鑑』亦採其中張彖指楊國忠為冰山語、則其書實在二人以前(紀昀『四庫全書』「開元天寶遺事」提要)。

(10) 這三首詩中所有的許多內容、正是今日所見「開元天寶遺事」所佚部分的記載、這可以說是對今本之不足的補充(繆元朗校點「開元天寶遺事」、『巴蜀叢書』一、巴蜀書社、一九八八年)。

(11) なお岡田充博氏のご示教によれば、范成大(一一二六—一一九三)の『石湖居士詩集』卷三にも「題開元天寶遺事四首」詩がある。其一「羯鼓」、其二「纏頭三百萬」、其三「豬龍」等の用語は「楊太真外傳」に出據し、其四「風流陣」の語は「開元天寶遺事」に出據する。范成大的詩題の「開元天寶遺事」も固有書名か一般名詞か、なお疑念が残るが、當時「開元天寶遺事」の語が一般的であった事の證左になるであろう。更に金文京氏から、元・陳孚『剛中觀光稿』所収「與李子構讀開元天寶遺事」詩(『元詩選』二集所収)、元・王惲『秋澗先生大全文集』卷二十七所収「讀開元天寶遺事」詩(『四部叢刊』所収)等のお教えをいただいた。いずれも宋元時における該書の流行に關わる資料である。日本中國學會大會(筑波大學、二〇〇三年十月)での拙論口頭發表時にいただいた兩氏、及び下注(14)に關して助言をいただいた芳村弘道氏に感謝する。

(12) 清・馮應榴輯注『蘇軾詩集合注』卷三(上海古籍出版社、二〇〇一年)による。原著名は『蘇文忠公詩合註』。

(13) 書名は假稱。卷末に三頁に亘って黃丕烈手抄と思われる跋文を影印する(うち半頁は朱印)。版心に西泠印社/吳氏聚珍版と刻する。十行十八字、二卷一冊、本文三十三葉。架藏本には朱活字による文字の異同の傍記が多數見られる。刊行年不明。影印の原本は黃丕烈『士禮居藏書題跋記』卷四に擧げる「開元天寶遺事二卷」と思われる。なお、何焯、黃丕烈跋の明建業張氏銅活字印本「開元天寶遺事」二卷一冊九行十八字の書目が『北京圖書館古籍善本書目』子部雜家類に見える。

(14) 參考までに、筆者が調査した「開元天寶遺事」の古寫本、和刻本を以下に續けて示す(多くの圖書館等が藏する後世の和刻本は除く)。

⑪ 『開元天寶遺事』古寫本。百四十六條、有自序。天理圖書館藏。……帙に「文明永正頃古寫本、吉田家舊藏本」「昭和三十年十月二十五日、寄贈反町茂雄氏」とある。題記が正しければ、室町期の古寫本を反町茂雄氏が天理圖書館に寄贈したものである。

⑫ 『開元天寶遺事』古活字版。百四十六條、有自序。大谷大學圖書館神田文庫。……神田喜一郎博士舊藏本である。

「開元天寶遺事」の傳本について

『大谷大學圖書館藏神田鬯盒博士寄贈圖書善本書影』（大谷大學圖書館、昭和六十三年）一六九頁に「元和中木活字印本」と誌す。なお、川瀬一馬『増補古活字版の研究』上（The Antiquarian Booksellers Association of Japan、昭和四十二年）三八四頁にいう「東洋文庫・神田喜一郎氏藏」とはこの書のことであろう。

⑬ 『開元天寶遺事』寛永十六年（一六三九）刊本。百四十六條、有自序。『和刻本漢籍隨筆集』六（汲古書院、昭和四十八年）に影印。

以下、阿部隆一『増訂中國訪書志』（汲古書院、昭和五十八年）所収「國立故宮博物院藏楊（守敬）氏觀海堂善本解題」、和田萬吉『古活字本研究資料』（清閑舎、昭和十九年）等に言及する龍門文庫、雲村文庫、東洋文庫所藏の『開元天寶遺事』については未見である。更にこの外に「開元天寶遺事」諸本の異同を記したものに、岡本況齋「開元天寶遺事攷補」（靜嘉堂文庫藏『岡本況齋雜著』所収）がある。

(15) 任繼愈主編『中國藏書樓』（遼寧人民出版社、二〇〇一年）貳、中編第七章、九九一頁參照。該書は次の黄丕烈跋にも言及する。

(16) 陽山顧氏名元慶者、在吳中爲藏書前輩、非特善藏而又善刻、其標題『顧氏文房小説』者、皆取古書刊行、知急所先務矣。此『開元天寶遺事』雖未知所從出之本云何、然借西賓陸拙生藏『歷代小史』本證之、彼已脱落幾條、是此本爲善。このうち、『歷代小史』は本文⑤『歷代小史』百三十九條を指すであろう。また「知急所先務」は、『孟子』盡心上の「堯舜之知而不徧物、急先務也」に基づく語である。

(17) 丁如明輯校、上海古籍出版社、一九八五年。

(18) 拙著『楊貴妃文學史研究』（研文出版、二〇〇三年）參照。

(19) 『資治通鑑』卷二七二に「存島封を嗣ぎ、大位に即くに及び、自ら以て唐の天下有るを繼がんとし、國を遂に號して唐と曰ふ」とある。